

保育者省察尺度に関する探索的研究(1) —保育現場における反省的实践—

杉村伸一郎¹・朴 信永²・若林 紀乃³

Exploratory research on a reflection scale for kindergarten and nursery teachers(1) : Reflective practice in kindergarten and nursery schools

Shinichiro Sugimura¹, Shin-Young Park², and Sumino Wakabayashi³

In order to clarify a structure of reflection of kindergarten and nursery teachers, a questionnaire survey was conducted. Based on the factor analysis results, it was concluded that a three-factor structure is appropriate for 3 types of reflection, reflection on themselves and on children, and reflection through other person (s). Nine sub-scales for the reflection by kindergarten and nursery teachers indicated some significant correlations with the questions about daily life of kindergarten and nursery teachers. These results imply that validity of this scale is partially satisfying. Nevertheless, findings of the factor analysis indicate the necessity of studying reflection in terms of time span.

Key Words : kindergarten and nursery teachers, reflection, reflective practice

保育者の実践と成長において省察は重要な役割を果たすと考えられている。例えば津守(1980)は、反省に考察を加える精神作業を省察とよび、省察により「実践の場では気づかれなかった子どもの世界や、自分自身の前提を、より明瞭に見ることができるし、それらのことの本質に近づくであろう」と述べている。また、近年は、schön(1983/2001)が提唱した「反省的实践家」という観点から、保育における知が捉え直されつつある(若林・杉村, 2005)。

しかしながら、保育者の省察や反省的实践に関する理論的研究や実証的研究は、学会発表を除くとほとんどなく、省察のメカニズムまで言及している論文は、筆者が知る限り見あたらない。例えば、浜口(1999)は省察に関する数少ない理論的研究であり、省察のプロセスを(1)実践、(2)想起、(3)記録の記述、(4)解釈、(5)再び実践、という5つの小過程からなるサ

イクルとして捉えているが、現象学的考察にとどまっている。また、吉村ら(1997)は、2名の保育者に観察と面接を行った結果から、実践→保育当日の省察→実践→翌日の省察→実践という実践と省察の連続過程を構成している。保育当日の省察の機能を経験的記述化、翌日の省察の機能を抽象的一般化と考察している点は評価できるが、省察の全体構造や省察と実践との機能的関係にまで踏み込んでおらず、今後の課題として残されている。

さらに最近では、実践を振りかえるために行われる保育カンファレンスにおいても省察が重視されている(若林, 2004)。しかしそこでも、省察という用語は厳密に定義されずに曖昧なまま用いられている。省察の対象が、保育当日の出来事であっても、保育者の子ども観であっても、同じ省察という言葉で語られる。したがって、保育者が省察するように言われても、具体的にどのようにすればよいかわかりにくく、また、保育者に何らかの変化が起きた場合も、省察という中身が曖昧な言葉にもかかわらず、それによって認知過程が説明されたことになって

1 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設
2 広島大学大学院教育学研究科博士後期課程
3 呉大学看護学部

しまい、保育者も研究者も思考停止に陥ってしまいがちである。

保育者の省察に関する研究は以上のような状況であり、省察という概念が十分に整理されてこなかったために、子どもと向き合っている場での気づきとよべるような省察と、価値観が変わるような深い省察とでは、認知過程が大きく異なると考えられるにもかかわらず、両者の違いを明示的に語ることはできなかった。また、保育の実践や実践を見直す保育カンファレンスにおいて、省察や反省的实践が重視されているにもかかわらず、省察を測定する尺度がなく、省察の機能に関する実証的研究も行われていないために、実際のところ省察がどのような役割を果たしているのかが明らかにされていない。

そこで、保育者の反省的实践に関するモデルの構成と省察尺度の開発を行い、省察のプロセスやメカニズムを明らかにするとともに、省察の構造や機能を実証的に検討することを目的とする。本研究では、まず、省察の構造を明らかにするために、保育における省察に関連する項目を幅広く収集し、探索的に因子分析を行うとともに、保育者の日常の行動や感情ならびに利用している知識などと省察との関連を検討する。

方法

対象者 調査対象者は広島県三次市の保育者研修に参加した保育者75名であった。対象者の属性の詳細を表1に示した。

調査時期等 2006年8月に、保育研修の最初

に一齐に実施した。

質問紙の内容 質問紙は、保育における省察に関する36項目と、保育者の日常に関する9項目、保育で使う「4つの知」に関する4項目の合計49項目から構成され、最初の頁に、性別、年齢、保育経験年数（産休・休職期間は除く）、集団討議の経験等を尋ねるフェイスシートがつけられた。

保育における省察に関しては、まず、朴・杉村（印刷中）で作成された、子育てを対象にした省察に関する質問項目（親自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察、各150項目以上）を参考に、行動、感情、認知の3つの側面に分類したり、行為前、行為中、行為後に分類することにより、多様な省察過程が含まれるように作成した。最終的には、保育者自身に関する省察項目と子どもに関する省察項目を、行動、感情、認知の3つの側面について各4項目の計12項目ずつ、他者に関する省察項目を、対話4項目、省察と改善、各2項目の計8項目、さらに、直接的な情報収集に関する4項目を加え、合計で36項目作成した。

保育者の日常に関しては、「日ごろ日記やブログをつける」「日ごろ自分だけの時間がもてる」「物事をじっくり考える方だ」「ポジティブ志向である」「他の人の話に耳を傾ける方だ」「日ごろ保育でのストレスを感じる」「自分の保育に自信がある」「日ごろ仕事に充実感を感じる」「保育士をずっと続けていきたい」の9項目について「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「どちらともいえない」「やや

表1 調査対象者の属性

		群					
		3-5歳児担任	0-2歳担任	パート・臨時	主任・所長	合計	
人数 (男, 女)		27 (2, 25)	13 (0, 13)	10 (1, 9)	17 (0, 17)	75 (3, 70)	
平均年齢 (SD)		37.7 (9.0)	38.2 (10.2)	34.7 (9.8)	50.6 (5.0)	39.9 (10.8)	
平均経験 (SD)		15.9 (8.6)	14.3 (19.9)	9.1 (6.6)	28.3 (6.2)	17.1 (10.6)	
免許 (%)	保育士	5 (18.5)	1 (17.7)	0	2 (11.8)	10 (13.9)	
	幼稚園	1 (13.7)	0	0	0	1 (11.4)	
	両方	21 (77.8)	12 (92.3)	9 (90.0)	15 (88.2)	61 (84.7)	
討議経験 (%)	無	0	0	1 (12.5)	1 (16.3)	2 (12.9)	
	1回	1 (13.8)	0	0	0	2 (12.9)	
	数回	12 (46.2)	9 (69.2)	5 (62.5)	13 (81.3)	42 (60.9)	
	定期	13 (50.0)	4 (30.8)	2 (25.0)	2 (12.5)	23 (33.3)	
討議の場 (%)	有	22 (84.6)	12 (92.3)	5 (62.5)	14 (82.4)	57 (81.4)	
	無	4 (15.4)	1 (17.7)	3 (37.5)	3 (17.6)	13 (18.6)	

注) 無記入があったため、合計の数が一致しない箇所がある。

あてはまる」「あてはまる」の5段階評定で尋ねた。

また、保育で使う「4つの知」に関しては、下記のように「知」を定義して、それぞれの「知」を使う程度を尋ねた。一般知 専門書・教科書・保育雑誌等書かれているような知識。一般社会で言われていること。活動知 保育活動中に感じたことや、保育活動から得られた考えや思い。個人知 経験によってつくられた個人的な信念・保育観・子ども観・発達観など。過去に自分が経験したこと。協働知 園の中でのコミュニケーションをとおして構成される知識や価値観など。同僚から言われたこと。

予備調査として、省察と「4つの知」の質問項目を「まれに」「たまに」「ときどき」「いつも」の4段階評定で、東広島市の私立幼稚園に勤務する保育者14名に実施したところ、5項目で天井効果がみられ、意味がわかりにくいと指摘を受けた項目もいくつかあった。そこで本調査では、「まれに」「たまに」「ときどき」「よく」「いつも」の5段階評定に変更するとともに、いくつかの項目の表現を意味が伝わりやすくなるように修正した。

結果

本研究では、3-5歳児に対する日常の保育を想定して省察に関する項目を作成したため、以下の分析は、3-5歳児の担任である27名を対象に実施した。

尺度の構成 まず、保育における省察に関する質問項目の選択肢「まれに」-「いつも」に

対して1点-5点を与え、36項目の回答の平均値と標準偏差を算出した(表2, 表3, 表4)。各項目の平均値は、保育者自身に関する省察では、認知の4と15, 行動の5などが高く、感情の13, 14, 16などが低い。子どもに関する省察では、行動の26, 感情の24, 直接の23などが高く、直接の34, 認知の29, 感情の32などが低い。また、他者をとおした省察では、省察の7と36が高く、改善の8や対話の33が低い。

次に、平均値±1SDを基準に項目分析を行ったところ、天井効果やフロア効果は見られなかった。そこで、全ての項目を用いて、保育者自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察に分けて主因子法による因子分析を行った。

最初に、保育者自身に関する省察12項目と、直接的な情報収集に関する4項目の内、保育者に関連する2項目の合計14項目に対して因子分析を行った。その結果、直接的な2項目は、他の項目と性質が異なり、他者をとおした省察に関連すると考えられたので、改めて保育者自身に関する12項目に対して因子分析を行った。

固有値の変化(5.39, 1.35, 1.14, 0.95, …)と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。回転前の3因子で12項目の全分散を説明する割合は65.6%であった。3つの因子は、子どもに対する自分の感情、伝達内容、子どもに対する自分の態度に関する省察なので、順に「自己感情」

表2 保育者自身に関する省察の因子分析結果(3・4・5歳児担任, Promax回転後の因子パターン)

分類	項目内容	I	II	III	平均値	SD
感情 13	自分が子どもに対して日ごろ抱いている感情について考えることがある	1.01	-.34	.05	3.16	1.11
感情 16	子どもと接しているとき、自分の感情がどのように表れているか考えることがある	.75	.25	-.18	3.30	1.10
感情 14	子どもに何か言った後、そのときの自分の感情を振り返ることがある	.57	.24	.13	3.27	1.04
行動 9	子どもに何か言った後、自分の言動や態度がよくなったかどうか反省することがある	.48	.37	.14	3.56	0.85
認知 25	子どもに何か言った後、自分は子どものことをどう受けとめ返していたか考えることがある	.04	.76	.17	3.81	0.68
認知 4	子どもに伝えたいことがあるとき、どのようにしたらうまく伝わるか考えることがある	-.30	.73	.07	4.41	0.64
認知 15	子どもと話している最中、ちゃんと伝わっているかどうか自分の伝え方を意識することがある	.27	.62	-.21	4.07	0.73
行動 12	子どもに何か言う前に、自分の言動や態度がどのような影響を与えるか考えることがある	.18	.33	.11	3.67	0.78
行動 5	保育者としての日ごろの振る舞いが適切かどうか考えることがある	-.02	-.05	.75	4.11	0.80
感情 6	子どもに何か言う前に、感情的にならないように注意することがある	-.05	.23	.59	3.63	0.97
認知 17	自分の保育の方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	.42	-.18	.48	3.56	0.93
行動 2	子どもと接しているとき、自分の態度や言動に注意を向けるよう意識することがある	-.03	.20	.39	3.85	0.66
因子間相関		I	II	III		
		I	-.57	.57		
		II	-.57	.57		

「伝達認知」「自己態度」と命名した。

同様に、子どもに関する14項目に対して因子分析を行った。固有値の変化(4.79, 1.96, 1.49, 1.42, 1.14, 0.74, …)と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられ、順に、「子ども分析」「変化察知」「子ども注意」因子と命名した(表3参照、回転前の3因子の説明率は58.9%)。「子ども分析」は、保育の中で子どもの行動や感情を分析する程度、「変化察知」は、保育の中で子どもの変化を察する程度、「子ども注意」は、保育の中で子どもの行動や感情に注意を向けている程度、を測定していると考えられる。

また、他者に関連する10項目に対して因子分析を行い、固有値の変化(3.52, 2.10, 1.13,

1.03, 0.74, …)と因子の解釈可能性から、3因子構造が妥当であると考えられた。そして、負荷量を参考に、「情報利用」「問題解決」「保育改変」因子と命名した(表4参照、回転前の3因子の説明率は67.4%)。「情報利用」は、保育の中で子どもに関する情報を利用する程度、「問題解決」は、保育に関する問題を他者との対話をとおして解決する程度、「保育改変」は、保育において自分の見方や方法を改変する程度、を測定していると考えられる。

各尺度の得点 各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することにより、各尺度の得点とした。また、内的整合性を検討するために α 係数を算出した。以上の結果を表5に示す。一部の尺度で α 係数が若干低かったが、他では

表3 子どもに関する省察の因子分析結果(3・4・5歳児担任, Promax回転後の因子パターン)

分類	項目内容	I	II	III	平均値	SD
認知	22 子どもと接しているとき、自分の伝えたことを子どもがどのように受けとめているか気にすることがある	.76	-.13	.19	3.96	0.85
行動	21 あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある	.72	-.22	.13	4.00	0.78
認知	35 子どもをほめたり叱ったりした後、それが子どもにどう受けとめられたか考えることがある	.70	.04	-.10	4.04	0.71
感情	27 子どもに何か言い聞かせる前に、子どもの気持ちを考慮することがある	.61	.19	-.21	4.07	0.68
認知	29 子どもをほめたり叱ったりする前に、子どもがどう受けとめるか考えることがある	.49	.29	.16	3.63	0.84
直接	34 子どもに園以外での様子を聞くことがある	.47	.18	-.40	3.41	1.08
感情	24 子どもをほめたり叱ったりした後、子どもの感情を察することがある	.47	-.06	.31	4.33	0.78
行動	31 子どもの行動の変化がその子にとってどのような意味をもつのか考えることがある	-.01	.93	.04	3.81	0.92
感情	32 子どもの日々の感情の変化について考えることがある	-.08	.82	.04	3.70	0.82
認知	30 子どもがどう変わってきたか振り返って考えることがある	.06	.48	.22	4.07	0.68
直接	23 子どもが問題のある行動をしたとき、その場で子どもに理由を聞くことがある	-.04	-.02	.86	4.22	0.70
行動	11 子どもと接しているとき、子どもの行動に注意を向けるよう意識することがある	-.12	.26	.62	4.04	0.85
行動	26 なぜ子どもが今そのような行動をしたのか、考えることがある	.06	.03	.45	4.37	0.49
感情	18 子どもと接しているとき、子どもの感情の変化に注意を注ぐことがある	.16	.18	.31	4.07	0.73
因子間相関		I	II	III		
		I	—	.16	.55	
		II		—	.49	

表4 他者をとおした省察の因子分析結果(3・4・5歳児担任, Promax回転後の因子パターン)

分類	項目内容	I	II	III	平均値	SD
直接	19 保育に関する本や雑誌を読み、自分の保育と照らし合わせるがある	.95	-.08	-.06	3.52	1.05
省察	7 子どもに関するいろいろな情報を得たとき、自分が担当している子どもに合うものを利用することがある	.85	-.05	-.06	3.85	0.67
省察	36 子どもに関するいろいろな話を聞いて、自分が担当している子どもを見直すことがある	.39	.14	.16	3.67	0.73
対話	3 他の人と話すことによって、自分の保育の問題に気づくことがある	-.17	.82	.11	3.48	0.80
対話	10 保育に不安やストレスを感じたとき、他の人の意見を参考にすることがある	.25	.82	-.06	3.56	1.12
対話	1 他の人と話しているうちに、保育に関する疑問が解決することがある	-.12	.66	.05	3.37	0.74
直接	20 自分が伝えたことを子どもが覚えているか確かめることがある	.04	.45	-.40	3.37	0.88
対話	33 他の人と話しているときに、自分が担当している子どもの意外な面に気づくことがある	.19	-.08	.72	3.26	0.71
改善	8 自分の担当している子どもが他の人にはどのように見えているかを聞き、自分の見方を改めることがある	.11	.16	.69	2.96	1.15
改善	28 他の人の保育の話聞いて、自分のやり方を改めることがある	-.14	-.05	.54	3.41	0.64
因子間相関		I	II	III		
		I	—	.16	.55	
		II		—	.49	

問題のない値が得られた。平均値をみると、保育者自身に関する省察では、「自己感情」が他の2つより低く ($F(2, 46)=11.64, p<.01$; LSD 法による下位検定で「自己感情」と「伝達認知」「自己態度」の間が5%水準で有意)、子どもに関する省察では、「子ども注意」が他の2つより高く ($F(2, 46)=3.58, p<.05$; LSD 法

による下位検定で「子ども注意」と「子ども分析」「変化察知」の間が5%水準で有意)、他者をとおした省察では、「保育改変」が「情報利用」より低かった ($F(2, 46)=4.07, p<.05$; LSD 法による下位検定で「保育改変」と「情報利用」の間が5%水準で有意)。

また、保育者自身に関する12項目、子どもに関する14項目、他者に関する9項目の平均値と標準偏差を算出したところ、順に3.72 (0.58), 3.94 (0.45), 3.46 (0.55) であり、子どもに関する省察が高く、保育者自身に関する省察、他者をとおした省察、の順に低くなっていた ($F(2, 46)=11.45, p<.01$; LSD 法による下位検定を行った結果それぞれの平均値間が有意)。

さらに、省察の程度に影響すると思われる保育の経験年数と討議経験との関連を調べた。経験年数に関しては、10年未満、10年以上20年未満、20年以上の3群に分けて、「保育や子ども

表5 3・4・5歳児担任の各尺度の平均と標準偏差

項目数	α 係数	平均値	SD	
自己感情	4	0.86	3.35	0.86
伝達認知	4	0.74	3.99	0.53
自己態度	4	0.69	3.79	0.61
子ども分析	7	0.80	3.92	0.56
変化察知	3	0.81	3.86	0.69
子ども注意	4	0.65	4.18	0.49
情報利用	3	0.74	3.69	0.69
問題解決	3	0.78	3.47	0.75
保育改変	3	0.69	3.22	0.68

表6 3・4・5歳児担任の経験別の尺度平均値

	保育経験年数 (平均値)			討議経験	
	10年未満	10年以上20年未満	20年以上	1回・数回	定期・継続
	7人 (5.4年)	11人 (14.4年)	9人 (25.9年)	13人	13人
自己感情	3.00 (0.88)	3.23 (0.88)	3.78 (0.74)	3.48 (1.04)	3.29 (0.68)
伝達認知	3.79 (0.53)	4.11 (0.49)	4.00 (0.59)	4.02 (0.58)	4.00 (0.50)
自己態度	3.68 (0.64)	3.70 (0.58)	3.97 (0.65)	3.98 (0.66)	3.65 (0.52)
子ども分析	3.76 (0.67)	3.97 (0.34)	3.98 (0.71)	3.89 (0.70)	3.91 (0.40)
変化察知	3.29 (0.65)	4.09 (0.73)	4.04 (0.42)	3.74 (0.80)	3.90 (0.53)
子ども注意	4.00 (0.48)	4.27 (0.43)	4.19 (0.60)	4.17 (0.54)	4.15 (0.47)
情報利用	3.17 (0.55)	3.67 (0.71)	4.07 (0.52)	3.81 (0.83)	3.64 (0.54)
問題解決	3.24 (0.69)	3.45 (0.93)	3.67 (0.55)	3.46 (0.76)	3.51 (0.79)
保育改変	3.05 (0.68)	3.06 (0.65)	3.58 (0.66)	3.28 (0.79)	3.14 (0.59)

表7 保育省察尺度間の相関係数 (3・4・5歳児担任)

	自己感情	伝達認知	自己態度	子ども分析	変化察知	子ども注意	情報利用	問題解決	保育改変
自己感情	—	.60**	.59**	.46*	.55**	.40*	.59**	.43*	.36
伝達認知		—	.53**	.48*	.42*	.63**	.49*	.25	.12
自己態度			—	.10	.25	.48*	.52**	.53**	.39*
子ども分析				—	.44*	.33	.26	.12	.16
変化察知					—	.48*	.70**	.18	.42*
子ども注意						—	.45*	.38*	.24
情報利用							—	.16	.48*
問題解決								—	.45*

* $p<.05$, ** $p<.01$

に関する集団討議を、授業や研修の中でどの程度経験したことがありますか」という討議経験に関しては、数回以下の群と一定期間継続してある群に分けて、各尺度の平均値を算出した(表6参照)。「現在、通常の職員会議以外で、保育や子どもに関する集団討議の場がありますか」という質問に関しては、「ない」と答えた者が少なかったため、比較を行わなかった。

保育経験年数に関して3つの群の平均値の差を検定するために分散分析を行ったところ、「変化察知」と「情報利用」において有意であり(順に $F(2, 24)=4.09, p<.05$; $F(2, 23)=3.90, p<.05$), TukeyのHSD法による下位検定により、「変化察知」では、10年未満群の得点が10年以上20年未満群の得点に比べて有意に低いこと、「情報利用」では、10年未満群の得点が20年以上群の得点に比べて有意に低いことが明らかになった。また、討議経験に関して2つの群の平均値についてt検定を行ったところ、いずれの尺度においても得点差は有意ではなかった。

尺度間相関 次に、保育省察尺度間の相関係数を表7に示す。下位尺度間の相関の半数以上は、有意な中程度の相関であった。しかし、「子ども分析」と「自己態度」「問題解決」「保育改変」, 「問題解決」と「情報利用」, 「保育改変」と「伝達認知」では、低い相関であった。

保育者の日常と「4つの知」との関係 保育者の日常に関する質問項目の選択肢「全くあてはまらない」-「あてはまる」に対して1点-5点を与え、保育省察尺度との相関係数を算出した(表8)。「日記やブログ」が「自己感情」「情報利用」と有意な正の相関を、「熟考」が「伝達認知」「自己態度」「変化察知」「子ども注意」と有意な正の相関を、「傾聴」が「子ども

注意」「問題解決」と有意な正の相関を、ストレスが「自己感情」「子ども注意」「問題解決」と有意な正の相関を、「充実感」が「子ども注意」と有意な負の相関を示した。

最後に、保育で使う「4つの知」と保育省察尺度との相関係数を表9に示す。「一般知」が「自己感情」「自己態度」と有意な正の相関を、「活動知」が「保育改変」と有意な負の相関を、「個人知」が「伝達認知」「子ども分析」と有意な正の相関を示した。

考 察

保育における省察に関する質問項目を、自分自身、子ども、他者という省察の対象別に因子分析を行ったところ、保育者自身に関する項目では、一部、感情と認知がまとまりとして分かれた。しかし、子どもに関する項目では、行動、感情、認知というまとまりは見られず、そのかわりに、「子ども分析」「変化察知」「子ども注意」という因子に分かれた。

表9 保育省察尺度と「4つの知」との相関係数(3・4・5歳児担任)

	一般知	活動知	個人知	協働知
自己感情	.47*	-.14	.04	-.21
伝達認知	.20	.05	.43*	.13
自己態度	.51*	-.09	.19	.10
子ども分析	.30	.22	.44*	.15
変化察知	.33	-.04	.22	.12
子ども注意	.16	-.02	.07	.16
情報利用	.42	-.14	.06	-.11
問題解決	.39	.11	.07	.41
保育改変	.21	-.48*	-.29	.16

* $p<.05$

表8 保育省察尺度と保育者の日常に関する項目との相関係数(3・4・5歳児担任)

	日記やブログ	自分の時間	熟考	ポジティブ	傾聴	ストレス	自信感	充実感	保育士継続
自己感情	.43*	-.10	.28	.30	.04	.43*	-.06	-.07	.34
伝達認知	.26	.00	.39*	.12	.06	.30	-.11	-.32	-.02
自己態度	.29	-.22	.38*	.01	.17	.29	-.08	-.19	.09
子ども分析	.33	-.18	.09	-.16	.03	.12	.02	-.01	.12
変化察知	.31	-.20	.41*	.16	.17	.15	.17	-.14	.22
子ども注意	.00	-.22	.41*	-.07	.46*	.44*	-.26	-.40*	-.19
情報利用	.50**	.01	.20	.16	.21	.28	.17	-.32	.21
問題解決	.20	-.07	.30	-.28	.48*	.58**	-.26	-.19	-.03
保育改変	.34	-.16	-.03	-.29	.37	.35	-.12	-.27	.29

* $p<.05$, ** $p<.01$

「子ども分析」は、「子どもと接しているとき、自分の伝えたことを子どもがどのように受けとめているか気にすることがある」「あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある」という項目のように、保育の中で子どもの行動や感情を分析する程度を測定していると考えられる。また、「変化察知」は、「子どもの行動の変化がその子にとってどのような意味をもつのか考えることがある」「子どもの日々の感情の変化について考えることがある」という項目のように、保育の中で子どもの変化を察する程度を、「子ども注意」は、「子どもが問題のある行動をしたとき、その場で子どもに理由を聞くことがある」「子どもと接しているとき、子どもの行動に注意を向けるよう意識することがある」という項目のように、保育の中で子どもの行動や感情に注意を向けている程度を、測定していると考えられる。

このように具体的に比較すると、「子ども分析」「変化察知」「子ども注意」は、それぞれ、子どもに接する前後の省察、比較的長期にわたる省察、子どもに接している最中の省察として、省察の時期によって区別することができそうである。今回は、項目の選択を時期の区別という観点から行わなかったために、保育者自身に関する省察や他者をとおした省察では、各因子が時期による区分と明確には対応していないが、項目選択の段階から時期による区分を考慮した場合は、子どもに関する省察と同様に、省察の時期によって因子が分かれる可能性がある。

また、各項目の平均値の結果もそのような可能性を示唆している。保育者自身に関する省察では、「自分が子どもに対して日ごろ抱いている感情について考えることがある」など、感情に関連した項目の平均値が低かった。しかし、子どもに関する省察では、同じ感情に関する項目でも、「子どもの日々の感情の変化について考えることがある」の平均値は低いが、「子どもをほめたり叱ったりした後、子どもの感情を察することがある」の平均値は高い。したがって、行動、感情、認知という3つの側面により省察の程度が異なる可能性とともに、省察の時期によって省察の程度が異なる可能性も示唆される。

以上述べてきたように、省察の構造を省察の時期という観点から再検討する必要があるものの、今回、暫定的に作成された尺度により、いくつかの興味深い知見が得られた。まず、各尺

度の平均値の比較により、保育者自身に関する省察では、「自己感情」の平均値が他の2つより低く、子どもに関する省察では、「子ども注意」が他の2つより高く、他者をとおした省察では、「保育改変」が「情報利用」より低いことが明らかになった。さらに、省察の種類と比較により、子どもに関する省察の平均値が最も高く、保育者自身に関する省察、他者をとおした省察、の順に低くなることが明らかになった。

これらの結果から、一般的に、子どもに関して省察するよりも自分に関して省察することは少なく、さらに、他者をとおして省察することがより少ないといえる。また、それぞれの省察においても、比較的頻繁に行われることとそうでないことがあり、自分自身に関しては認知や態度に比べて感情について省察することが少なく、また、他者をとおした省察では、情報の利用や問題解決に比べて自分の見方や方法を改変することが少ないと考えられる。今後、このような省察の頻度が少ない内容に関しては、個人差の検討により、単に考える必要がないので頻度が少ないのか、考えた方がよいにもかかわらず人によっては、その内容を省察の対象にすることが難しく、その結果として頻度が少ないのか等を明らかにしなくてはならない。そして、後者の場合が多ければ、省察の改善方法に関する研究が望まれるであろう。

次に、自分自身、子ども、他者という省察の対象間の相関から、それぞれは相互に関係しているものの、下位尺度によっては、他の下位尺度と低い相関しかみられないものもあり、省察の働きを詳細に検討していくためには、今後、いくつかの下位尺度を設定した方がよいことが示唆された。また、「変化察知」のように保育経験年数とともに得点が増加する尺度がある一方で、「子ども分析」のように増加しないものもあるので、同じ内容を対象にした省察でも下位尺度に分けて調べていく必要があるだろう。さらに、省察の下位尺度と保育者の日常や「4つの知」との相関の結果も、その必要性を示唆している。例えば、ストレスと有意に関連するのは「自己感情」「子ども注意」「問題解決」であり、他の省察との相関は低かった。また、個人知と関連するのは「伝達認知」と「子ども分析」であり、他の省察との相関は低かった。

また、省察の下位尺度と保育者の日常や「4つの知」との相関の結果は、省察の働き方に関

する知見を提供している。例えば、「自己感情」に関して省察する頻度が高い人ほど、日記やブログをつけ、ストレスが高く、専門書・教科書・保育雑誌等書かれているような一般的な知識を利用する、という結果は、「自己感情」に関して省察すると、感情がより活性化されるので、その結果、ストレスが高まり、それを低減させるために日記やブログをつけ保育雑誌等を読むようになる、というように解釈することもできる。今後、尺度の開発とともに、省察に関連することを、その因果も含めて明らかにすることにより、保育者のストレスの軽減や自信・充実感の向上に役立つ知見を得ることができよう。

最後に保育経験と省察との関係について述べる。「変化察知」および「情報利用」に関しては、保育経験年数とともに得点が増加する傾向にあったが、「自己省察」や「保育改変」に関しては保育経験年数による得点に有意な違いはみられなかった。このことから、「変化察知」「情報利用」といった、子どもの変化を見つけたり使うべき情報に敏感になる行為は経験とともに培われ、保育の熟達した技術として確立していくと考えられる。それに対して、自分を見直す「自己省察」や自分の保育を変えていく「保育改変」は、経験によって習慣となりにくいものであると考えられる。今後、省察の対象別の経験による変化の違いに着目するとともに、省察の程度が何を反映しているのかも検討していかななくてはならない。

引用文献

- 浜口順子 1999 保育実践研究における省察的理解の過程 津守真・本田和子・松井とし・浜口順子(著) 人間現象としての保育研究1(増補版) 光生館
- Schön, D. A. 2001 佐藤学・秋田喜代美(訳) 専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—ゆみる出版 (Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.)
- 朴信永・杉村伸一郎(印刷中). 親の省察尺度の作成に関する予備的研究 幼年教育研究年報, 29.
- 津守 真 1980 保育の体験と思索—子どもの世界の探究— 大日本図書
- 若林紀乃 2004 保育カンファレンスにおける

進行係のあり方—カンファレンスでの主任保育士の会話に注目して— 幼年教育研究年報, 26, 77-83.

若林紀乃・杉村伸一郎 2005 保育カンファレンスにおける知の再構築 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部(教育人間科学関連領域), 5, 369-378.

吉村香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美 1997 保育者の成長における実践と省察 保育学研究, 35, 288-295.

謝 辞

本研究にご協力を賜りました保育者の皆様に深く感謝申し上げます。